論文内容の要旨

論文題目

「日本農学に関する批判的考察」
ーー在野農学の水脈とエコロジカル・アグロノミーへの転換課題ーー

氏　　名　　中　島　　紀　一

本論文は、世紀的転形期としての 21 世紀における農学のあり方を探るための基礎作業として、20 世紀、特にその後半期における日本農学の展開過程を批判的に考察し、新たな農学のあり方として「エコロジカル・アグノロミー」という方向への転換の必要性を提示したものである。

本論文では 20 世紀における農学を「近代農学」と規定し、そのパラダイム的基本原理を 19 世紀ドイツの農学者リービヒによる「農耕循環の外部補給による補完・代替方策の確立」に求めた。このような「近代農学」から「エコロジカル・エコロジー」への転換という課題は、20 世紀末の時代状況から要請されてきたものであるが、日本農学の過去にはそこへのいくつかの先行水脈があったと考えられる。本論文では、その重要な例として民間における「在野農学」とアカデミズムにおける「総合農学」の試みを取り上げ、その展開と消滅への顛末を検討した。また、「エコロジカル・アグロノミー」構築への直接的模索事例として有機農業を取り上げ、特に有機稲作における技術形成の状況を整理し、併せて運動戦略のあり方について考察している。

20 世紀は成長し続ける巨大な生産力が形成された時代だった。この時代に、科学は技術を主導し、科学技術の急速な発展は生産力の爆発的成長を創り出した。科学技術主導の巨大生産力の形成というあり方は 20 世紀後半期により顕著となり、支配的なものとなった。この時期は先進諸国における市民社会の大衆社会化が進み、大衆消費＝大量消費の社会条件・社会システムが形成された時代でもあった。この２つの要素が結びついて先進諸国における大量生産＝大量消費の成長メカニズム、すなわ「豊かさへの時代」が出現する

ことになった。

ここで科学技術論として重要な点は、生産力の爆発的成長が、大量生産＝大量消費という形で市民社会全体を巻き込み、巨大な社会的循環系として展開されたという点であろう。

しかし、終わりのない循環系と認識された科学技術主導の成長メカニズムは、たとえそのプロセスで公害管理等についての注意深い措置がとられたとしても、実は、入口における資源収奪と出口における大量廃棄という契機を不可欠な必然とする、すなわち周辺の存在に支えられた巨大な使い捨て的ワンウェイシステムであったことが次第に明確になっていく。成長メカニズムが有効に機能すればするほどその非循環的構造は深刻な欠陥として露呈することになった。地球環境問題、第三世界における自然収奪と絶対的貧困の集積と固定化等々の諸問題はそうした構造問題の表象と理解される。

だが循環破綻的社会問題の普遍的な形成は、時代のこのようなあり方への異論を市民社会内に形成することになる。1970 年代には異端として退けられた反科学論、オルタナティブテクノロジー論なども次第に社会的支持のある議論として受け止められるようになり、1990 年代にはこのような事態を解決する道筋論が、20 世紀の総括と 21 世紀への展望という形で多面的に論じられるようになる。

代表的議論として、20 世紀後半期に世界を席巻した成長メカニズムを仮にフォーディズムと規定するとすれば、21 世紀ビジョンを、世紀末的な外部不経済も内部化していくウルトラフォーディズムとして構想していこうとする論議と、脱フォーディズムとして構想しようとする論議とがある。いずれの立論においても爆進する科学技術の取り扱いは中心的論点に据えられている。20 世紀末の諸矛盾をどのように解決するのか、20 世紀の生産力展開を主導した科学技術をどのように捉えるのか、をめぐって市民社会における 21 世紀ビジョン論議において相当に厳しい亀裂が広がりつつあると見られる。

21 世紀における農業展望もこのような亀裂ある 21 世紀論議の重要な一角をなしている。そこでは 21 世紀に予測される食料問題への対応方策、生物多様性の保全のための農業の多様性確保、砂漠化や熱帯林破壊と途上国農業開発との関係、これからも農業国として生きるであろう途上国の開発ビジョン、WTO 体制のもとでの各国農業の多様性のあり方、等々の多岐にわたる論点についてさまざまな対抗的議論が展開されている。こうした状況の下で、農業にかかわる科学技術のあり方、端的には農学論に関しても、従来の認識の再検討とあらたな組み立てが社会的にも強く求められるに至っている。

従来の農学論、端的には近代農学論は、生産性の向上と効率化を至上命題として組み立てられており、それは大局的には農業の工業化、工業的論理の農業への適用、工業的生産力の農業への援用等を内容とするものと理解できる。しかし、21 世紀論で求められる農学論はこのような単線的論議ではなく、多様な産業目的、多様な目標価値論を踏まえた、複線的な農学論の構築が求められているように思われる。農業はさまざまな価値観の下で生きる世界各国のたくさんの民衆が担う生業的産業であり、それを支える技術論は本来多様性において認識されるべきであった。近代農業・近代農学はそれを一元的論理で把握しようとしてきた。振り返ればそれは一つの時代的イデオロギーであったのだが、そのような社会認識の行き詰まりと弊害は相当明確になってしまったと理解されるべきだろう。

本論文では、こうした 21 世紀における農業あり方と可能性をめぐる社会的議論の亀裂を念頭において、農学論、農業技術論の視点から 20 世紀後半期の農業を振り返り、21 世紀農業についての試論を提起することを課題としている。そこで特に意識した論点は、循環型社会、循環型農業の創造という将来展望を前提として、農業生産活動に係わる自然と人為の位置関係、直接的生産者としての農業者の主体性、農業生産の風土性などである。

具体的には、第Ⅰ章で、20 世紀末の科学技術と農学をめぐる時代状況について検討し、本論文における日本農学に関する考察の基本的視座を設定した。

第Ⅱ章で近代農学の基本パラダイムをリービヒを始祖とする農学論、すなわち自然の循環に支えられて進行する農業生産過程を解明し、それをより効率的な外部補給技術で代替させるという考え方として理解し、その対極に農業生産過程とそれを支える自然の循環を強くリンクさせながら両者をより良く進行させることを目指すエコロジカル・アグロノミーという展望を提起し、本論文での農学論の基本的枠組みを提示した。

第Ⅲ章では、日本において上述のような近代農学が農業生産過程を本格的に掌握するようになる 1950 年代に、実は近代農学とは対抗的なエコロジカル・アグロノミーの萌芽的形成が、民間学的在野農法（民間農法）という形で自生しようとしていたことを、稲作を例にとって、その技術形成の様相を発掘し、それらの農学的創造性、到達点、問題点等について検討した。

第Ⅳ章では、農学アカデミズムの場でも、1950 年代には在野的視点からの農学形成へのチャレンジがあったことを新制大学農学部における総合農学科と農村生活研究への萌芽を例として示し、同時にそれらの取り組みが農学の近代化という流れのなかで自己解体していく過程を跡付けた。

第Ⅴ章では、1950 年代における民間農法を先行水脈として、1980 年代頃から模索されはじめるエコロジカル・アグロノミー形成への胎動を有機稲作を例として検討した。

第Ⅵ章では、オルタナティブという議論のもつ問題性を検討した。本論文では近代農学に対するオルタナティブとしてエコロジカル・アグロノミーという構想を提起した。しかし、このような二分法的論議には枠組み自体がもつ問題性がつきまとう。この点を認識するために、オルタナティブ運動の一典型として有機農業運動を取り上げ、それが内包してきた問題点を検討した。

第Ⅶ章では、本論文の結びとして、現代農学の焦点として遺伝子組換え技術の意味について検討し、エコロジカル・アグロノミーは循環型社会論の基礎理論として位置付けられるべきだという視点から 21 世紀における農業と農学のビジョンを試論として提起した。